



三絃会 講演会

演 題

「いつも

チャレンジ精神で」

当金庫は11月15日、三絃会講演会を鹿児島市の城山観光ホテルで開催。NHK入社当時から46年間、アナウンサーとして活躍し、現在はフリーアナウンサーとしてTBSの人気番組「日立 世界ふしぎ発見」でキャスターを長年務めている草野仁さんが「いつもチャレンジ精神で」と題して講演しました。以下はその要旨です。

■演題 いつもチャレンジ精神で

■講師 **草野 仁氏**
くさの・ひとし
TVキャスター

■プロフィール

1944年2月24日、満州・新京生まれ。長崎西高校を経て東大文学部社会学科卒。67年NHK入社。鹿児島放送局、福岡放送局などを経て77年NHK東京アナウンス室へ。主にスポーツキャスターとしてモンテリオール、レーククラシッド五輪をはじめ、さまざまなスポーツの実況中継を担当。「ニュースセンター9時」「ニュースワイド」のキャスターも務めた。85年NHK退社。以後、フリーのTVキャスターとして活躍中。レギュラーTV番組にTBS「日立 世界ふしぎ発見」、グリーンチャンネル「草野仁のスタジオGate」など。著書に「人生ふしぎ発見」(メディアファクトリー)「生きているからこそ」(小学館)「信頼は、つくれる」(ワニブックス)「話す力」(小学館新書)など。

01. 人はさまざまな能力を持って生まれてきている

今から46年前、取材記者をしたいとNHKの採用試験を受けましたが、採用通知にはアナウンサーとして採用するということになっていました。望んでいないアナウンサーとして採用され、辞退しようと思った人間がこうして皆さんの前で話をし、情報を伝える仕事を46年間も続けてくることができました。そこから言えることは2つあります。

一つは、私たちにとって進学や就職を前にして自分自身を冷静に見つめ、こういう分野に進めば頑張っってやっていけそうだと判断して自身の進路を決めていきます。ただその時に思った分野にだけしかその人は適性や能力を持っていなかったかという点とまったく違います。人間は結構、複合的・多角的にさまざまな能力を持って生まれてきているということです。自分が向いていないと思うことも必死でやっていくことが大切です。挫折したぐらいで慌てず焦らず、もう一度冷静に体勢を立て直して次の目標に向かって100%全力投球していけば、必ず人間は道を開くことができるものです。

02. お互いの気持ちを率直に伝え合える家庭環境を

もう一つは、話し言葉で自分の気持ちを周りの人に100%理解してもらおうとする行動は、皆さんが自分の胸の中に感じ取った思いを、こういうふうには言えば周りの方は分かってくれるかなと思ひ、言葉を選び、表現していく、皆さんの100%自由

裁量に任された行動です。話すという行動の90%ぐらいいちいち考えなくても瞬発力でやり取りできるケースです。ただ結婚式のお祝いの言葉とか、PTAの会合で意見を求められたりした場合、折に触れて自分の気持ちを正確に伝えるために少しエネルギー、愛情を注いで話すように努力すれば、話し上手、伝え上手になれます。

われわれの行動の出発点は家庭です。家に帰ってきて出勤、登校するまでの間に、疲れた心と体を元に戻し、修復していく場所は家庭です。家庭は母なる港でなければならないと思います。子どもたちが育っていく最初の段階から子どもたちが両親に何をしてほしいのか、何をしてほしいのかを思いのままに率直に表現できるような言語環境をまず家庭の中で築き上げていくことが、人間が言葉を使って自分の気持ちを表現するためには最も大切なことだと思っています。

例えば学校でいじめられてSOSの信号を出せずに命を絶つケースがありますが、そんなさまざまな悲劇は家庭の中で十分なコミュニケーションを交わす環境をつくっていけば減らすことができると思います。

03. 自分でやると決めたことをずっとやり続けていく

私が担当している「日立 世界ふしぎ発見」という番組はスタートして28年目になりました。スタート前、フレッシュな回答者を選ぼうと黒柳徹子さんをお願いに行きました。当時52歳です。最初は断られたのですが、1週間後何うと、黒柳さんは自分の頭の中に蓄えた知識のレベルはいったいどの程度かチェックし、自信を持てる分野もあるが、ほとんど知らない分野が結構たくさんあると気づいたそうです。出演を機会に地理と歴史について少し腰を据えて勉強し、頭の中で知識の体系みたいなものが少しでも築けたら人間として素晴らしいことはないと思い、1週間前に大まかなテーマを教えていただくことを条件に出演を引き受けてもらいました。

他の回答者もまったく同じ条件でこの番組がスタートしました。黒柳さんはものすごく忙しい方ですが、毎回分厚い数冊の本を読んで出演しています。モーツァルトの時は1週間に16冊も読んでいました。この27年半にわたって1回も欠かすことなく続けています。計画は誰にもできますが、やると決めた以上はどんなに体調が芳しくなくても疲れていても、そのことを繰り返していく。80歳という年齢で「徹子の部屋」という自分の名前が冠名の番組をやっているのは世界中でも黒柳さんぐらいです。自分で決めてやろうということをずっと続けていることが、80歳になってもなお芸能界の一線で仕事をさせていくパワーにつながっているのだと感じます。

われわれは定年あるいは古希になった時点で、これまでのペースを少し緩めてしまうことがかえって人間の衰えを表面化させ、加速させることにつながっているのではないかと。頭脳を使い過ぎて病気になるということは基本的にありません。むしろ使わずに死なせてしまう脳細胞が結構たくさんあると指摘されています。頭はできる限り使っていくべきです。

04. 教育の力で培われてきた日本人の素晴らしい姿勢

私も結構年を取ってきて、来年2月で70歳になります。自分の関心の焦点がだんだん、日本人とはどういうものかということに集まってきています。

460年ほど前、日本を訪れたフランシスコ・ザビエルがイエズス会に送った書簡によると「いままでさまざまな民族、国民を見てきたが、これほどレベルの高い素晴らしい国民は初めてだ。礼節をわきまえ、自然と調和して素晴らしい生活ぶりだ」と書いています。ドイツ人のシーボルトは、日本人を教える中で、本当に熱心で、克己精励して頑張る日本人の姿を見て感動しています。アメリカのペリー提督は交渉の中でオランダ語を話す日本人通訳の質問内容の高さに驚き、「日本が産業化されると相当な国になるに違いない」という印象を書き残しています。明治に入り、イギリス人で日本に帰化したラフカディオ・ハーンは、日本人の倫理性の高さに感嘆しています。

これらは、長い間にわたって日本人が素晴らしい姿勢を保ちながら生きてきた民族であることを物語っています。その根源を探ると、幕末のころ全国に1万1千あった寺小屋という私塾に行き着きます。各藩のリーダーたちは、一番大切なことは子弟の教育をおいて他にないという基本的な認識を常に持ち続けていたことが、日本人をいつの時代を通じても高いレベルに維持し続け、明治維新後もそんなに時間をかけずに一流の国々に追いついた背景になったと思います。

05. 事を始めるのに年齢は関係なく、前向きに進み続ける

日本人というのは素晴らしい、誇るべき国民だと思います。その中で特徴的な一つに、年齢に対する細やかな神経を持っているということです。テレビや新聞のニュースでは、良いことをした人も悪いことをした人も必ず年齢が出てきます。こんな報道をしているのは世界中でも日本しかありません。一緒に仕事をする人が年上かどうかを認識して、敬語を使って表現するといった具合に、いつも自分と身の周りの方の年齢に細やかな神経を払い続けています。

それは素晴らしい美徳に作用する一面ですが、それがマイナスに作用していることがあります。50歳で英会話の勉強を始めようと思ったとしても、年齢というハードルを置いて止める人が結構います。でも年齢というのは、何か事を成そうとするにつけ、それを阻害する要素には絶対になりません。むしろ、自分がやろうと思ったならば、自分にとってまさにその時がそのことの適齢期だったと思い、取り組むべきです。

一番大事なのは、取り組んだ以上は半可な形で途中で投げ出さず、しつこく頑張っていく中から自分独自の新しい発見が生まれてくるものです。同時にそのことに関わっている自分自身の新しい可能性の発見にもつながっていくのだと私は確信しています。長寿社会を充実感をもって生き抜くためには、そういう形で前向きに進んでいくことが大切だと考えています。